

自由と労働

1

北摂アナキズム研究会

状況とわれわれの位置

小池創生

1

昨秋期斗争過程から開始された新左翼諸派間における更なるセクト主義的対立抗争と、各々の内部における分化解体、総じて再編というよりは分解過程にあって、大衆運動組織の領域においても直接あるいは間接に問題が持ちこまれている。この問題とは、党派と大衆組織との区別と連関をめぐる諸問題であり、具体的には反戦青年委員会を中心とする各党派による系列化と、それに対する勢力の伸張である。即ち現実の運動過程における一党独裁的傾向とプロレタリア連合戦線的傾向との、非妥協的斗争であり、かつ又前者における際限のない細分化、それ故のより一層の官僚主義の強化と、後者の一定の勢力伸張とそこにおける思想的理論的ヘゲモニーをめぐる内部斗争である。

労働者戦線においては民同右派による同盟の強権的支配体制及び民同左派による総評の指導ならざる強圧は、労使一体あるいは労使協調なる改良主義路線のより一層の徹底化による、ブルジョ

ア民族主義・帝国主義的労働運動による労働者戦線の一元的支配のための公然たる策動を急速に押し進めつつある。従って、社会党及び総評においては、右派たる江田一宝樹ラインと左派たる佐々木一協会派ラインとの間の斗争によってすでに単組にまで及ぶ総評総体の分解と再編は時間の問題と化しつつある。これに対して反戦青年委員会を結集軸とする新左翼的青年労働者と改良主義

内部の実力斗争派は、その勢力の拡大強化によってすでに中小単組においては、反幹部斗争による圧力の増大からわずかとはいえ幹部内に表面上の革命派を形成しつつあり、これによって総評左派が中間派と化しつつあるが故に、総評左派内部における不安と動搖は大規模なものとなつておらず、更なる分裂が準備されつつある。かかる労働者戦線における激動の開始は、單に日帝の攻撃といふ面から見ることは正しくなく、ここにはすぐれて斗争主体の質的深化と量的拡大による一連の主要な面があることを把握しておかねばならない。

今日の腐敗しつつある労働者戦線のブルジョア民族主義的方向に対決しつつ、新たなるプロレタリア国際主義の方向において労働者戦線をその深部から構築しようとする運動、これが反戦青年委員会の主要な方向として定着しつつある。けれども他ならぬこの運動内部に極めて有害な思想、即ちプロレタリア独裁の名の下における一党独裁を志向する政治イデオロギーが、新左翼諸派の上意下達式組織回路及びフラクションによつて、強力に扶植され

一大連合——八派連合系「全国反戦」として、あるいは又革マル系「全国反戦連絡協議会」として、地方段階においては、共産同系「関西地区反戦連絡会議」、革共同前進派系「大阪地区反戦連絡会議」等として、党派系列の地区反戦として自己の勢力を囲い込む活動によつて、持ち込まれかつ一定の基盤を形成することに成功している。

けれどもセタクト利害の大衆組織内部への直接的持ち込みが、大衆運動そのものを破壊しつつあることを検討しはじめた諸党派は、今や彼らの官僚主義的体質からして当然にも実現されるべくもない幻の「大ブント」構想をひねり出す一方、とめどもない内部分化を除名、再登録によつて行政官僚的に押しとどめようとしている。わが日本のボルシェビキ²諸分派は、その誇大妄想的方向からして大衆運動から遊離しかつ、大衆から「自由」であり続いている。彼らの特異体質はその党派革命——一党独裁に表現されているのである。

一党独裁を志向しかつ精力的に陰謀とその政治技術を駆使しつつ、ボルシェビキ諸分派は大衆組織の「軍團」化をもつて昨秋期斗争の路線を再びこの春期斗争に具現化せんとしている。彼らは街頭「群団」を形成することはできるだろう。だがしかし、ただそれだけのことである。勝利への展望は切拓かれるべくもない。プランキズムと純粹レーニン主義の間で、彼らは政治技術主義のかつ官僚主義的に、その時その時を最大限の努力でもつて乗り切

る他に途がないのであるから。

わが北摂アナキズム研究会は、今日の低迷する関西のアナキズム運動を、根底的に打開すべく労働者戦線の深部で、不斷の日常的組織的活動を革命的に推進しつつ、地区反戦をプロレタリア連合戦線の指導的軸へと意識的に高めるために、かつ又自らの勢力を現実の斗争の中で強化し拡大するために、地区反戦の内部において、共斗活動を革命的に推進する。又それのみにとどまらず、

北摂アナ研としての独自活動を、一方においては地区的課題の遂行において、他方では、アナキスト連合戦線の構築へ向けて、目的意識的に追求していく。これらの諸活動の統合において、われわれは斗争主体としての地区アナ研の全美西における形成を促進させつつ、大衆運動の自立を革命的に推し進めていくであろう。更にはその媒介としての革命思想運動集団を地区アナ研とは区別して独自に形成するための努力を主体的になっていくであろう。そこに学生戦線、高校生戦線をも抱括した大衆運動の自立のための媒介としての革命運動を構築していくであろう。(3・1)

2

「春季大攻勢」「四・二八大爆発」「工場からの総反乱」「恒常的武装斗争」「首相官邸・防衛庁攻撃」「バリケード春斗」「拠点政治スト」「都心制圧」——これらの大言壮語が八派系セクトの機關紙をうずめている。内実のカラッポなこれらの言葉を、

もはや誰もが信じてはいないのだが、各セクトは自ら信じてもいはず又、実現すべくもないこれらの言辞をふりまくことによつて、一体何を考えているのだろうか。彼らの本音は一体何か。一方において総評は期待されてもいなかつた「六月ゼネスト」を公然とすてさり、今や、社会党の反戦派ページと歩調をそろえて、労組からの反戦派ページを公然化させんとしている。彼らの本音も又どこにあるのか。

ところで昨秋期斗争において注目すべき質が少なくとも三点あつた。一つは労働者が自己の職場あるいは職業を直接に武器Vへ転化させる可能性を実現してみせたこと。二つはへ平和と民主主義Vの運動がへ自警団Vとして定着したこと。三つには全共斗運動の質的発展がへバルチザンVを生起するに至ったこと。この三点における内実を把握することができない限り、我々の運動が質的に発展することは期待できないだろう。それは我々におけるへ私人主義・サークル主義・分権主義V的傾向の根拠との斗いにおいて、我々自身の内なる解体を痛認させたところのものである。我々自身の内なる解体は、戦後アナキズム運動の一貫した合法主義と精神主義に対する苦斗の結果であり、唯一の成果であると言つてよい。我々は我々自身の更なる内的解体を究極まで推し進めつつ、再編を獲得していかねばならないが、それは自己の日常生活構造を対象化しつつ、その根拠との斗いを基礎にしてしか形成していくことが出きない。我々が「職業革命家」を「職業革命屋」

と侮蔑して呼称する意味を、我々の内部に構築、具現せねばならないのである。

さて政治集団が政治状況に対してもラジカルでありえず、文化集団が文化状況に対してラジカルでありえないという、かかる今日の社会状況が意味するところのものは、明確に革命主体の未成熟とその思想軸の混迷である。政治集団が政治状況との斗いにおいて、政治の総体性なる論理に頭脳を犯され、個別性を自然発生性として錯覚した時、その結果はラジカルでありえなかつた。自然発生的な個別性に立脚した総体性は、やはり自然発生的なものでしかありえず、個別性を目的意識的なものとして把握形成することを基底にしてしか斗争はラジカルなものとして展開することができないのである。この意味において我々は昨秋の「中電マッセント」が提起した質を、我々自身の内部に形成し又展開しなければならないのである。この課題をになう中からしかへ自警団Ｖに對決しうる運動は形成することができないのだということを認めねばなるまい。又、我々がハバルキザンＶとして評価しかつて攝取しなければならない内実は、彼ら学生の運動が全共斗運動を通じて、反大学から反学生へと到達した地平、即ちそのへ共産主義共同労働團Ｖの質にあるのであって、ゲリラ的軍事性にあるのではない。まさしくへ共産主義共同労働團Ｖは、プロレタリアートの私的生活構造に対する鋭い実践的批判でもあるのだ。かかる地平の「同志」に比較して今日残存している「全共斗」学生の質

的低劣さはあまりにも顕著である。最もよく斗う者は最も多く傷つく、ということの意味を真剣に考えてみるよう我々は、今日までオメオメと大学外でのみ「全共斗」を名乗つてゐる学生諸君に訴えたいと思う。へ自己否定Ｖとは言葉ではなく実践なのであるから。

一方、いわゆる「矢田事件」は一年を過ぎてゐるが、この「事件」を通して我々自身が学ばねばならない多くの課題を把握しておかねばならない。この間釜ヶ崎では釜ヶ崎解放戦線が運動を形成しはじめている。帝国主義日本の社会構造における三重構造を粉砕する斗いが、帝国主義的労働運動の波におおわれた上部階層の運動を突破して部落解放同盟や釜ヶ崎解放戦線あるいは朝鮮人台湾人等の在日「外国人」の下部階層による、重要な階級斗争がついにこの一年間に表出してきたのである。マルクスがルンベン・プロレタリアートとして侮蔑したところの、最も抑圧され続けてきた文字通りの人民が、日本の階級斗争の主体としてついに斗争の先頭に起ち始めたのである。我々が革命を考える限り、我々の運動は彼ら（この「彼ら」という言葉を我々は最大限早く「我々」としたいと願う）の運動が提起した課題を、我々の運動の質として内実化することができなければならない。言葉での空文句にしかすぎない「連帶」を我々は現実に斗争の真只中において具現しなければならないのであって、連帶を言葉だけで語る者は革命を言葉だけに腐敗させてしまう奴であるだろう。残念ながら

ら今我々はその奴等でしかない。この現実を我々は直視しそこから回避することなく、今後のすべての斗争の基軸を帝国主義社会の解体におきつゝ、我々の内なる帝国主義を粉碎しつくしていかねばならない。明らかに今我々は、我々自身の存在根柢との全面的な対決を避けることはできない。否、回避することが不可能になつてゐるのである。それはへ自警団との対決が避けられないのと同じことなのである。我々の斗いは向三軒両隣との斗いである。実名での斗いである。

さて最初に戻るが、帝国主義社会状況の中においては、もはや八派的政治斗争では何一つとして獲得できないことが、ますます明確になってきている。彼らは自己の葬式を出すことすらできな今までに没落しつつあるが、未だ我々は彼らの葬儀を主催することができないほどの微々たる勢力でしかない。けれどもその日がさほど遠くはないことも十分に予測することができる。彼らは増え口ぎたなくホラとデマを吹きまくるであろうが、そのことによつて増々自己の消滅を速めるだろう。最後の一撃は我々の手にゆだねられている。

(4・1)

3

反戦青年委員会運動の内実はすでに反戦から反帝へと発展してきたが、これを定着深化させていくことが、とりわけ日常生活構造の内部において獲得されねばならない。もはや通一遍のへ政治へ

斗争等では、へ平和と民主主義の危機意識に基く「自警団」には、対抗すべくもない。帝国主義本国におけるわれわれの状況は、帝国主義ブルジョアジーの側からの社会再編にともなう最後の攻撃に直面しているのだということを把握せねばならない。我々にとって死以外ではありえない。日帝が社会の基底部において、日常生活意識を完全に抱括することをめざして、情報の画一化、教育の専門差別化、更には労働の機能主義的管理化等を、より一層強力に推進しつつある時、我々の斗いは、社会總体に対する重層的な反帝斗争とならざるをえない。いかなる困難があるとも、とりわけ日常生活構造の内部における反帝斗争こそが定着深化せしめられねばならないのである。このためにはまず第一に、今日のセクト的発想からする大衆運動の指導ならざる「指導」が大衆運動の内部において粉碎されねばならない。具体的に言うならば、四・二八斗争を首都総結集なるものに集約せんとした党派こそが粉碎の対象である。中央権力斗争なる政治用語をもって何事かを語ったのだといこんでいる者は、自己の思想的欠陥が次の諸点にあることを認識して自己変革を促進しなければなるまい。欠陥の第一点は、中央権力斗争が議会主義の一変種だということである。六十年安保においてデモは国会へと集約されたが、七十年安保においてはデモは行政中央官庁へと言うわけ

なのであるが、かかる発想は議会主義との差わざかに一ミリである。欠陥の第二点は、中央権力斗争なるものを組織するためには地方での斗争を放棄するという発想にある。この発想の根本的な誤りは、日常生活の変革を語ることよりも天下・國家を論じるところの方が大事だ、あるいは意識が高いのだと錯覚しているところにある。反戦派が残念ながら少数派である現段階において、しかもわれわれに特に有利な状況があるわけでもないにもかかわらず、首都総緒集をワメク者は、クーデターを夢見るブラキストにもなりきれない、ブランキズムの尻尾をつけたした俗流ジャコバン主義者他ならないのである。

われわれは△大衆運動の自立△とは大衆運動それ自身の目的意識的な構築にあることを確認する。それ故に、目的意識性を政党に集約し、大衆運動に自然発生性なる意義を付与するといった運動構造が、その質において国民国家的△政党政治的な運動構造を一步も越えるものではなく、明白に一党独裁的発想の産物であることを確認する。まさしく一党独裁とは評議会（ソヴィエト・コミユーン等）に敵対する質をもつた、国民国家の発展のあるいは多党制の発展のそれぞれ最終段階にすぎないのである。

反戦青年委員会運動のセクト的分断に对抗しつつ、反帝共斗としての地区反戦を形成強化すべく、われわれはこの分野において三・一五万博粉碎現地斗争を突破口として、この二ヶ月間に大き

なエネルギーをそいできた。われわれはセクト「反戦」、デッチャアゲ反戦」を拒否するが故に、内実のある地区反戦が北摂地区において形成されるまでの間、過渡的に五地区反戦共斗を形成する東淀川地区反戦に参加しつつ、この間五地区に結集する戦斗的労働者と共に斗ってきた。五地区はこの間実質六地区となり、明日にでも七地区となることができる状況にあり、反帝共斗戦線は着実に拡大され強化されつつあるが、他方のセクト反戦は自己の日常性を対象化することができないが故に、崩壊の危機に直面あるいはすでに突入している。即ち、ブント系地区「反戦」においては単独ではもはやその名目すら維持しえないが故に、北摂地区反戦連絡会議なるものを組織し（実質はやつと一地区反戦）、もっぱらこの名称でもって斗争にかかわっているが、彼らのハシゴ型組織構造において地区反戦がブント→共青→反帝戦線→関地区というように位置づけられているが故に、地区反戦の質が異常に低められており、その上実体上ブントも共青も反帝戦線も関地区も全く同一に近いが故に（従つてピラミッド型ならぬ空洞のハシゴ型組織と言うのだ）セクトの組織運動構造としては、形式と内容が分離しているにもかかわらずこれを解決することすらできない末期症状となっている。最近ではすでに彼らの長年の拠点と目されていた尼崎地区反戦内部においてすら他の戦斗的労働者たちから相手にされていない状態なのである。ブント系反戦こそはありとあらゆるセクト反戦の未来を先進的に表現しているものに

他ならないのである。

前進派系地区反戦においては、セクト系列化運動の第一走者としての位置を保持するために、ありとあらゆる官僚主義的かつ政治技術主義的策動を唯一の中軸としてキバッテはいるが、地区反戦¹¹政治动员組織と化しているが故に、チビスター官僚の劣悪な質が運動に素朴に反映されることによって、大衆支持の壊滅的減少（「前進」発行部数の激減等）を引き続いて深化させており、六月決戦のパンクの後には、もはや“毎日が決戦だ！”と叫ぶ以外にはなくなろうとしている。それ故にこそ、彼らには崩壊への道しか残されていないのだが、彼らは自己の官僚的政治性によってのみ延命が可能であると正しくも直感しているが故に、例えば最近の五・九治安弾圧体制粉碎集会においても、反レバ斗争を取りあげることを拒否したのであった。つまり、自己の内部に反レバ斗争の中軸となるべき主体が欠落（全員ブル転した結果）しているが故に、階級斗争の圧倒的必要性を彼らのセクト的利益と比較して、階級斗争に対する公然たる裏切りをなすというわけなのである。今や日々との反革命性を明確にしつつある前進派系「反戦」に対しても、われわれの取るべき態度は一つしかない。即ち解体打倒である。

かかる破滅への道を遅ればせながらも正直に主張しつつ登場したのが第二走者¹²統社同系「反戦」なのである。これも又解体打倒の対象以外ではありえない。彼らは各府県毎に根こそぎ动员し

て○○中央反戦をデッヂ上げたのだけれども、このことによつて自己の勢力をスッパダカにさらして、自らセクトの名にすら値しないことをわざわざ宣伝するという、泣きつツラの状態なのであるから。

ML・四トロ・共労党・革労協等に関するでは、どうこう言うだけの勢力もないでの省略する。

ここで革マル系「反戦」について述べねばならない。彼らのセクト系列化に対する応急手当は、彼らの頭脳構造の観念性を立派に実証している。もっぱら関西における革マル系の特異性の最高のものは、言葉と行動の完成された不一致の体系にある。彼らは大阪府下において二つのデッヂアゲ反戦¹³北東地区反戦と南部地区反戦を各々わずか數名で維持しているのだが、彼らの組織戦術なるものは、徹頭徹尾一党独裁的な発想の産物である。それをわずかばかり実証しておくことにしよう。言葉ではこうなのだ。

「反代々木系活動家の統一行動の推進機関としての性格と意義をもちえるものとして明確に位置づけ、その左翼的強化をめざして反戦青年委員会（直接的には「職場反戦」）への組織的かわりそのものの新たな前進を切り開いてきた。（ファッケル）ところが行動ではなく逆になる。二つのセクト反戦をデッヂ上げることによって“新たな前進を切り開いてきた”と言うのだ、“性格と意義”とは一体何んのことなのだ。またこうも言うのだ。“（前略）とりわけB B系地区反戦に対して、加入戦術や寄生虫戦術を

とつて介入の斗いをおしすすめ、（中略）、彼らの地区反戦の再編の斗い、新らたな地区反戦の創造強化の斗いをおしすすめていかなければならない。」（ファッケル）と、ところがここでも行動では全く逆になるのだ。彼らのこの一節は一貫した空文句であつて、現実にはセクト反戦を再編するどころか今までに「創った」二つの「反戦」を維持するのに、汲々としているのである。言葉と行動の完成された不一致の体系。変革の余地がないこの観念論者には、それらしい末路を与えるべき。それは精神と肉体の首尾一貫した分離の体系である。われわれの△絶対自由化棒▽によって永遠に精神と肉体を「自由」にしてやろう。彼らも又それが本望に違いないのだから。」クチブーチャとは一体どこのどいつのことなのだ。自己を対象化してみることをおすすめるが、永久に分離されることはもつといふことだと思わずにはいらぬ。まさしく自らあけすけに表明するように彼ら革マル派は階級斗争の「寄生虫」なのだから。

八派系チビ（指導性がないからセノビしたくてもできないのだ）スタ「反戦」と革マル系ガリ（骨だけで肉がないのだ）スタ「反戦」を解体打倒し、全大阪反戦の革命的反帝共斗的再編を獲得することは我々の任務の主要な一つである。

一方、我々はアナキスト戦線内部において現在までに関西アナキスト救援委員会を物質化しつつ、更にはNPR研、神戸アナ研との連合行動を推進してきたが、我々は三・一五以来二ヶ月の活

動の中で、ようやく自己を斗争主体として定着せしめつづるといえるだろう。アナキスト高校生協会を中心にして高校生戦線における圧倒的進撃を獲得し始めた同志と連帯しつつ、我々はNPR研、神戸アナ研と共に労働者戦線における圧倒的進撃を形成していくかねばならない。更には小三木・山川の陰険なるデマゴギーによって分断されている先進的学生同志とも直接的な交通を回復しつつ連帯していくだろう。社会革命運動は自己の日常性を対象化しつつ、不斷にこの日常性を変革していくことから開始される以外はないのである。

(5・5)

4

再び「六月安保決戦」が叫ばれている。この空文句のコダマする政治空間において、社共は六・二三首都全国動員を、そして八派系セクトは六・一四首都総結集を、それぞれ行動方針として掲げつつ、象が墓場へ向かうごとく首都へ向かおうとしている。

中央集権主義者には中央権力斗争がふさわしいのだが、かかる中央政治をめぐる諸党派の対応は、明白に彼らの政治斗争が政党政治の水準にあることを示している。△前衛党▽なる発想は、必然的に△後衛大衆▽を必要とし、それ故に奪権斗争過程における△前衛党-後衛大衆▽の組織的指導関係は、奪権成功の後には△革命政府（前衛党）-労働者評議会（後衛大衆）▽の図式に基づく組織的権力（△支配）関係へ移行する。この結果を現在のロシア

国家資本主義体制あるいは中共國家資本主義体制に、我々は生き現実を見ることができる。まさしく政党政治の水準における政治斗争とは奪権斗争であり、その下における手段としての議会斗争と暴力斗争との差は、所詮目標を国会（立法機構）へ向けるかそれとも中央官庁（行政機構）へ向けるかの差違であり、この点において議会主義を否定するマルクス主義新左翼も又、別種の議会主義なのであり、二者の政治斗争の内実は五十歩百歩にすぎない。要するに彼らにとっての目的は誰が権力（＝支配権）を握るのかということであって、権力（＝支配）それ自体を廃絶することは「國家の死滅」の名によつて永遠の彼方へと昇天させられる。権力に餓えた政治屋集団＝前衛党の発想は、貧乏人が金持になろうと夢みるのと全く同じ意識構造である。彼らマルクス主義者は資本主義者のように経済力で人民を支配するのではなく、政治力で人民を支配しようというのである。「前衛」を自称するのは彼らの虚榮心にピッタリというわけだ。「六月安保決戦」がツブヤかれている。しかし我々にとってそのような決戦はありえず、あえて付言すれば日常の内なる斗いこそが、毎日の永久斗争こそが我々の人決戦である。反帝斗争とはすぐれて日常社会との斗いなのである。

帝国主義本国における反帝斗争を斗うことは、生産点での斗いを主要には労働組合運動の革命的再編へ向けて斗うことであり、そして地域社会での斗いを反戦青年委員会を軸とした地区共斗の

形成へ向けて斗うということである。従つて我々の全国斗争とは中央（＝首都）斗争ではありえず、各地区連合による各地区での一斉斗争を意味する。原点での又地区での斗いを抜きに組織される府県段階あるいは地方的斗いは、いかにその場に量を結集してもその内実はあまりにも空虚である。かかる低劣な運動構造を繰り返した結果が、現実の反体制運動の基盤的脆弱性を助長したのであり、セクト系地区反戦の没落崩壊を派生させたのである。我々は六月斗争を各原点各地区での斗いを主要なものとしつつ、そその斗いの上に運動展開過程の必要性において各段階の決起集会を組織しこれを結合することで全国斗争として斗うのではなくてはならない。六・一四あるいは六・二三首都総結集なる方針の無意味さを徹底的にバクロ批判しつつ、反帝斗争の内実を質的に深化定着せしめるのでなくてはならない。我々の反帝斗争とは反帝政治斗争ではなく反帝社会斗争である。

さて今日の労働組合運動の根源的な危機の内実は、何よりも第一にその組織構造に基因している。その体質はあたかも國家のミニチュア版であり、指導性が斗争内実の規定抜きに「統一と团结」を強調するため自發性が阻害される。現実には多くの場合指導性は官僚制に転化してしまっている。運動構造としての組合役員専従制は組合官僚の養成に役立ってきたのみである。専従を増加することが運動の発展を保証すると考える素朴な発想は、すでに事実によって誤謬であることを思い知らされているし、論理的にも

その誤謬は明白である。即ち、専従者は全人格的指導者として非専従者から区別され、その連関は中央集権構造によって、△ブルジョアジー——△プロレタリアート△階級関係性の逆立した関係性として、△指揮官——兵卒△関係性として定立されているが、その構造自体には一カケラの自己廃絶性も有してはいないのである。それ故にこの関係性は消滅することも廃絶されることもなく、可能性はひたすら固定化、更には権力構造化の方向を示している。従ってわれわれの推進する労働組合運動とは、単にその△ヘゲモニーを貫徹することでも、指導部を奪取することでもなく、明確に労働組合を社会革命の母胎として再編していくこと、即ち労組の構造改革を基礎としつつ斗争評議会への再編、更には自治評議会への革命を形成することである。われわれの立場は、△ナルコ・サンジカリズム△革命的労働組合主義でなければならぬ。マルクス主義者の二重組織論△政党——労組△は、必然的に△革命政府——労働組合△を帰結させるが故に、われわれはかかる思想が根底的に反革命的であることをバクロせねばならないし、かつ全生活の人民管理の組織的表現である自治評議会を、産別編成を軸に各段階において一元的に組織することが必要であることを明確に宣伝していかねばならない。今日の文明水準において地区別編成は生活上の意味を失っているのであり、それはせいぜい産別化への過渡として、あるいは日常生活空間の媒介としてのみ意味を有しているにすぎない。評議制社会樹立の観点から展望する時、い

わゆる労働者評議会（コミューン・ソビエト等）は産別編成を軸とするものであり、この立場においてわれわれはマルクス主義者のソビエト論と根底的に異質である。マルクス主義者の主張するソビエトとは所詮、自称革命中央政府の下請け機関としての地方政府にすぎない代物であり、それは彼らの思想が国家制社会を基礎にした政治思想であることの一表現なのである。現代ジヤコバン主義者△マルクス主義者の思想的破壊は、現実の運動上においてもますます明白なものとなりつつある。現代ジヤコバン主義の潮流は、すでに体制内化した部分△日共、ブランキズムへの傾向を強める部分△赤軍、ML等、そして新左翼諸党派の主流はますます無展望に落着きつつ、わずかに傍流がアナキズムの片言一句を水増し的に密輸入しつつ思想的再建を夢みているのである。

ところでわれわれは、安保△日米共同声明路線△粉碎・日帝打倒・全国農業自治評議会樹立という戦略スローガンを掲げつつ、その斗争路線として革命的反帝社会斗争を形成・発現すべく斗ってきたわけであるが、その第一歩をようやく日帝万博粉碎斗争にかかる中で、更には日帝侵略軍事綱△治安弾圧体制解体斗争△大阪港軍港化阻止斗争、あるいはダイキン軍需生産阻止斗争の組織化等）をになう中で、安保体制解体へ向けて踏み出してきたが、依然としてこの斗争を大衆的結集軸とはなしえないのである。勿論これらの諸斗争は原点斗争の質を形成しえておらず、それ故に生

してしまふまきなし
讀書制社会樹立の觀点から展望する時、い

これらの諸斗争は原点斗争の質を形成しえておらず、それ故に生

産原点斗争を頂点とする運動構造の内では媒介的な位置にあるわけであるが、それにもかかわらず我々はこの諸斗争を貫徹していくことにおいて、今一步自己形成を推し進めていくことが必要とされている。われわれは自己を、状況斗争主体から革命運動主体へと飛躍的に変革していくためにも、反帝社会斗争の原点への定着深化を獲得すべく、この六月斗争をマルクス主義諸党派の政治斗争至上主義を突破する斗いの創出へ向けて、自らを組織しつつ斗いぬくのでなくてはならない。われわれの戦場は前人未踏の荒野である。

(6・5)

私の報告

羽田一夫

〔編集局から〕

本文は筆者の了解を得て、神戸アナキズム研究会の「通信」第4号から転載した。転載の意義を編集局は次のように考える。即ち、「自由連合」第16号における井田不二夫と尾関弘の労働キャンプ運動に対する自己批判的総括の欠落と、イナオリに関して彼らのボヤキ以前に発表された本文をより広く告知して、彼らの体質をバクロするということである。

次号（九月発行）を確実に入手されたい読者は
次号（九月発行）を確実に入手されたい読者は
前金（百円）にて予約して下さい。

なお、予約読者には適時資料等をお送りするこ
とにしております。

昨秋の佐藤訪米による日米共同声明は日米帝国主義者の七〇年アジア支配の構想をあきらかにした。その主軸はアメリカ帝国主義のアジアにおける軍事支配の一定の再整理と、それを補完するための日本帝国主義の経済支配、さらにそれを後方から支える軍事力の増強——自衛隊の帝国主義軍隊への質的転換である。とりわけその中心はアメリカ帝国主義の極東における橋頭堡——太平洋のカナメ石——沖縄の侵略基地としての位置を沖縄（そして日

本）人民の沖縄解放・基地撤去の斗いから防衛しアジア人民抑圧の永久的な侵略基地として維持し、より一層強化するための日米合作——七十二年沖縄返還という路線決定である。

七〇年の今日において沖縄は日米両帝国主義のアジア支配の心臓部であり、それ故に沖縄問題が七〇年斗争の中心環としてあるのだ。

その七〇年四月に沖縄の地で行われる労働キャンプは、キャンプに参加する本土の労働者学生にとって第一に沖縄解放斗争の現実をじかにこの目で確かめ、自己の今後の行動のために学び得ることと、第二に労働キャンプに援農を通じて沖縄の土地斗争と沖縄解放斗争の一環を担うこと、この両者の結合としてあらねばならなかつた。労働キャンプ呼かけ人の呼かけにこたえて私が沖縄キャンプに参加したのもこのような立場からであつた。

しかし私のそのような問題意識はキャンプ全体の共通意識とはなり得ず、労働キャンプ呼かけ人への私の疑問は批判へと発展していつた。以下にその要点をかかげておきたい。

いったいキャンプ呼かけ人（○・A等）はこのキャンプをどのようなものとして構想していたか。彼らによると労働キャンプは沖縄問題を考えるための場（単なる場）を提供するものである。その中で各人の個人責任で行動すればよいのであって、最初から

ひとつの方針を労働キャンプとしてかかげることは彼らにいわせれば間違いなのである。この、そもそも前提としてある無方針性からキャンプそのもののアイマイ性がみちびき出されるのだ。

（自己規定の放棄というこの点を呼びかけ人とは別に多分に政治技術的に理解している部分がある。いわく、キャンプとしての方針を前提としてかかげると、政治的に無経験なノンボリ諸君が来なくなる、巾が狭められる。だからむしろ意識的にキャンプの目的を規定せず、参加した者をこちらへカクトクするよう工作すべきだという民青並の政治技術）。労働キャンプの雑居性・無原則性を最もよく示しているのが四・二八沖縄デーに関してである。労働キャンプ呼びかけ趣意書には、四・二八沖縄デー現地斗争には有志が参加する、となつてゐる。（キャンプ中の、不発に終つた全軍労第三波ストについても呼かけ人〇の意見は同じ。）ここには、沖縄解放斗争、その一結節点としての四・二八斗争に沖縄労働キャンプ總体として責任を持ち、主体的に取組もうとする立場が放棄されているのだ。考へてもみよ／高い船賃とメンドウな手続（それ自体は権力の責任である。）をすましてハルバル沖縄へ渡り、そこでキャンプ全体の意志として四・二八斗争に参加しない労働キャンプとは一体何なのか？この雑居性は個人意志の尊重などとは全く関係はない。これはまさしくギマン的である。労働キャンプに援農を思想的に捉えるに際してのこののようなアイマイ性は、このキャンプの無政治性としてあらわれる。もちろ

（この）各人の個の責任で行動すればよいのであって、最初から

イマイ性は、このキャンプの無政治性としてあらわれる。もちろ

んわれわれの運動は単なる政治性の次元をのりこえて思想性の問題としてすべてをとらえ、投げかえしていくことである。しかし、

ここでいう無政治性とは自己が誰の利益の立場に立つかという、最もキホン的な意味における問題である。すなわち、援農というのは本来きわめて政治的なものなのであり、キャンプ参加者の一人がいっていたように、その最も徹底した政治の一貫性を持つ援農は自衛隊の援農である。残念ながらわが沖縄労働キャンプはこれに及ばない。单なる人場の提供などかんがえたり個人の自発性▽個人責任▽といった（その内容を深化するのではなく）アイマイなことばかりかえてしまって、援農は単なる学生さんの社会奉仕に歪曲化されてしまうのだ。そのような援農にあっては思想ではなく肉体労働だけが自己目的化され、いわば肉体的疲労の内に思想は解消されてしまうのである。沖縄キャンプは最初の予定地I島では受入れ宿舎の不備から沖縄本島Kに移り、そこではサトウキビの収穫がもう終っているという理由で三転してM島へ渡ったという事情は単に事務的な行きちがいというより、以上のような援農を思想的に捉える視点の欠如から来る結果のように私には思われるのである。

私はもともと四・二八を現地でむかえる予定で沖縄へ渡ったのであったが以上のようない形での参加は要するに四・二八を見物するだけであり、無意味であると考えたので予定を早目に切上げて帰ってきた。（神戸出発四・四一四、一二帰着。キャンプ期間は

十二日間)

以上は私の沖縄キャンプの事実報告ではなく、キャンプ批判であるが、ひとまずこれをもって私の報告としておきたい。

（追記）帰神後、知人との討論の中で、援農参加者が無報酬で労働することへのギモンが出された。すなわち、援農の期間中、農民斗争の勝利に共通の利益を見出す農民側と援農側は、援農という具体的共同行動をつうじて一つの生活共同体を作るのであり、そうであるならば同じものを分合って食い、原則的にはその期間の共同労働の収穫をも分合わなければならないわけだ。原理的にはそうである。このあたりの私の理論的な把握はまだ不十分であるが、援農を宗教的・倫理的な自己ギセイとしてみるのではなく、資本主義社会の真只中にあるわれわれの斗争農民との連帯行動として捉えるのである限り、明確化を要求される問題だと思う。

自由と労働 第一日

一九七〇・七・二〇発行

編集発行 北摂アナキズム研究会

大阪府茨木市春日一の九の二一 森方

